

「2022年度タイ・チュラーロンコーン大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学経済学部4年 西田秀

私はチュラーロンコーン大学スプリングスクールプログラムを受けて、タイ・特にバンコクの発展と熱気、タイ人の国民性や生活習慣にひときわ関心を抱いた。そして今後のタイをはじめとした東南アジア新興国・途上国の産業や経済の成長をもっと目の当たりにしたいと強く感じた。

事前情報として、私はタイに関して、バンコクは日本と似た観光都市というぐらいのイメージしか持っておらず、またチュラーロンコーン大学に対しても、国内では最も歴史ある大学の一つとはいえ中心地にあるのだからそこまで土地を持っておらず中規模な大学だろうという印象だった。しかし、郊外のスワンナプーム国際空港から電車で1時間、バンコクの中心地サイアムに着いてまず思ったのは、圧倒的な商業施設の規模である。ガラス張りのスターバックスや巨大デジタル広告などを構えるショッピングモールが乱立しており、その光景は2週間のプログラムの間バンコクの多くのエリアで見られた。スケールの大きさは、大阪はおろか東京すら超えるのではないかと思われるほどで、バンコクの急速な経済発展をありありと体感した。

一週間を過ぎて迎えた唯一の土曜日にはアユタヤを訪れるプログラムが用意されていた。アユタヤの歴史や遺跡の特徴についてツアーガイドの方々の説明を聞きながら各所をめぐる中で、バンコクとは異なる時間の流れを感じた。なぜなら、事前配布されていた予定表に記載のタイムスケジュールから常に1時間の遅延でプログラムが進行していたからである。それでもガイドの方々は慌てる様子もなく、自分自身それこそタイの人々に感じていた国民性であった。大急ぎで観光するよりもじっくりとアユタヤを体感してもらおうという心意気だったのかは定かではないが、そのおかげで予定より長い時間アユタヤで穏やかな時の流れを味わうことができた。

今プログラムの一大イベントとして、日本語を副専攻しているチュラ大生との共同発表があった。チュラ大生と最終発表まで何度かディスカッションや食事会を重ねた中で感じたのは、対話を重んじる積極性とメリハリのある大学生活である。ディスカッション中には英語で私たち日本人チームとコミュニケーションを取りながらこちらの提案を受け入れつつ話を進めてくれたし、授業中にも教授と楽しそうに会話をしており、日本では珍しい光景だと感じた。メリハリは、普段の生活スタイルから感じられた。バンコクでは食事は基本的に外食がスタンダードで、夕食後のスイーツ巡りも欠かさない。そのためランチタイムの食堂やマーケット、ディナータイムのショッピングモールにはとても多くのチュラ大生や若者が見られた。そのため外での人付き合いの時間が多く、自宅での勉強時間の確保は難しいのではないかと思われたが、彼らはグループ内の課題を、締め切りを設定する前から既に完了させており、内容も手抜き感はなく十分すぎるほどであった。友達と遊ぶときと、一人で課題や勉強に向き合うときとのメリハリがしっかりしているからこそ抜かりのない学生生活を送ることができているのだと実感した。

以上のように、チュラーロンコーン大学スプリングスクールを通じて、バンコクが目覚ましい都市開発とアユタヤの穏健な雰囲気という対照的なタイの特徴を体感できただけでなく、現地の人々の日々の過ごし方からも、日本と大きく異なる考え方を学ぶことができた。私自身、既に就職活動を終えた身なので進路に大きな影響を与えるということはないが、今後社会人留学や海外派遣など、ビジネスマンとしてまたタイや東南アジアを訪れるチャンスがあれば絶対に逃したくないと感じ、もしバンコクに再び行くことが出来たら、デジタル経済や新興産業など、最先端の情報をこの目で見たいと、新しい目標を抱いた。